ひらがなの読めない子どもが漢字を覚えた

わたしが、いま、受け持っている学級には、一年生の一学期を終わっても、一文字のひらがなも読めるようにならなかった子どもがいます。こういう子どもは、わたしの十年間の小学校生活でも、ただひとりです。

この子は、ひらがな書きされた自分の名まえを見ますと、

「これはぼくの名まえだ」

といいます。しかし、その中のかなのどれかを取り出して、

「この字はなんという字？」

と尋ねますと、もうだめです。

「わからない、わからない」

の一点ばりです（この子は、入学前に一年間、幼稚園教育を受けており、自分の名まえだけはわかるようになっていたのです）。

ところが、漢字のほうは、32 字も覚えてしまったのです。かなは一文字も覚えられなかったけれども、漢字は、文部省の一年間の目標を、一学期で覚えてしまったのです。

わたしはけっして、漢字だけを特別に指導することはしません。文章に即して、かなと同じ程度に指導するだけです。わたしの教室には、よその教室によくある、漢字カードなど、一枚だって掲げたことはありません。漢字表など、もちろんはってありません。それでこの結果です。この事実を、どう考えたらよいでしょうか。

かんたんな字形のものほどむずかしい

ところで、この子どもの覚えた漢字の中には、数字は、「一」と「二」があるだけで、「三」以上の数字はありません。しかも、この「一、二」が読めたのは、一学期を終える直前だったのです。入学二か月後の 6 月 10 日のテストでは、「雨･雲･雪」や、「車･鳥･畑」などの複雑な漢字は読めるのに、「一、二」が、どうしても読めなかったのです。

わたしは、子どもに字を書かせ始めるのに、この「一、二、三」から始め、たびたび、くり返して練習させたものです。それは、この字の書き方は、いちばん基本的なものをもっているからです。「左から右へ」筆を動かし、「上から下へ」筆が及んでいきます。

ある時期には、毎日、この子の手を取って、

「さあ、一、二、三の三という字を書こうね。そら、イーチ、ニー、サン。棒が三本あるから、これは『サン』という字だよ。わかったね」

とこういう練習を何回くり返したことでしょう。ところが、一学期たっても、ついにこの、「三」が読めずに終わってしまったのです。